



阿茶院
もろ
上

洋学文庫
文庫 8
C 200
1



梨春先生著

乙酉
試筆

紅毛談

梧陰菴藏

晴
保
民
白
鏡
書



序

凡諸夏一待於言域
知必有象胥於觀之
官而各傳象於缺示



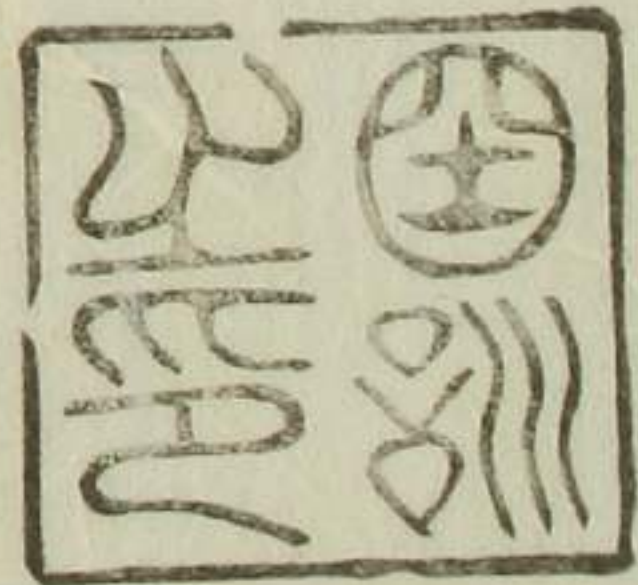
之倍蓋古之制也
特畜船連咽於廣港
也尚矣其言語亦法
粗以學於其性情風

化也不可得也
詩法亦亦以書法
黎妻因古人而高
云為植知忌之奇

雖際出於接晤之旨
忘峰足見喜欣之好
高耳一展之風月寧
無書尔若性情之妙

或係公署者特紀此
書之以與云因紀生
叙于中在少爾明和
乙酉之春桂川甫三

國訓撰



紅毛談序



春盡燕山雪倘飛。彼乃是北
 狄所常住。而不知其寒冷。人
 物俱遂生。赤道以南之人者。

怪之矣。或南方炎熱之地。雖
冬月不着纊。而耕瓜茄等之
俗。是亦北方之人所不嘗知
也。胡馬嘶北風。越鳥巢南枝。

輒感其所是。夫以世界之廣
大。品物之形狀。美惡各異。而
不礙眼所能及也。爰西距梵
漢。萬里餘而有國。我俗稱阿

蘭陀其地也。風土柔。四時正。人生溫和。而自開闢以來。無爭鬪之難。其智巧。而天文地理。及星學。甲宅州。且經歷萬

國。而量其國於有無。交易貨物。萬民之資。其切亦不少。年年來於我東方。而商賈。每春入東都。貢獻諸州土。宜其番

館滯留之間。不佞數聞彼邦
之人物及遠域之說話。書記
有年于此。今年夏正其前後
與小兒之玩爾。

明和二年乙酉春正月雞日

東都後藤先生稜春書景梧

陰菴



紅毛人肖像



紅毛人肖像

四

木

女人圖



紅毛袴卷の上

後反光生和菜ま編輯

世界は廣大あることと云ふは誠ならず
かゝる一玉の風土おのく回ド
くくべ人物もまゝに托ろくことか
るに買き固あり愚ある玉何れも
何れいハた聲を懐るもあはバ
まゝに不毛なる玉何れも中り

申^{ちろ}華^わ日本の西^{にし}少^{すく}よ^よ何^{なに}と^と阿^あ
 蒙^{まう}理^りと^とふ^ふは^はも^もか^かも^もと^と大^{だい}正^{せい}は^はあ^あは^は
 日^{にっ}本^{ぽん}九^く州^{しゅう}は^は大^{だい}さ^さほ^ほど^ど何^{なに}と^とい^いて^て
 主^{しゅ}を^を風^{ふう}去^{きょ}自^じ然^{ぜん}に^に社^{しゃ}あ^あつ^つく^くそ
 智^ちを^をあ^あま^ます^すく^くま^まあ^あう^うとい^いて^て
 他^た州^{しゅう}より^{より}い^いず^ずこ^こに^に宮^{みや}を^をあ^あり
 と^とい^いて^ても^も四^し書^{しよ}の^の正^{せい}に^に上^{じやう}古^こより^{より}
 人^{にん}民^{みん}より^{より}利^りに^に何^{なに}と^とい^いて^てあ^あり^りか^かり

と^とい^いて^て少^{すく}少^{すく}極^{ごく}の^の地^ちと^とい^いて^てあ^あり^り
 四^し十^{じゆ}七^{しち}度^どは^はい^いず^ずも^も日^{にっ}本^{ぽん}より^{より}い^いず^ずこ^こに^に
 一^{いつ}万^{まん}九^く百^{ひやく}里^り西^{にし}少^{すく}よ^より^りい^いず^ずこ^こに^に
 う^うら^らが^が日^{にっ}の^の出^でも^も日^{にっ}本^{ぽん}より^{より}い^いず^ずこ^こに^に
 あ^あり^りて^て出^でる^るよ^より^りい^いず^ずこ^こに^に白^{はく}月^{げつ}
 五^ご星^{せい}は^は測^{そく}度^ども^も夜^や日^{にっ}本^{ぽん}より^{より}い^いず^ずこ^こに^に
 何^{なに}と^とい^いて^てい^いず^ずこ^こに^に曆^{りき}法^{ぽう}も^も他^た州^{しゅう}を^を
 何^{なに}と^とい^いて^てあ^あり^り他^た州^{しゅう}の^の曆^{りき}ハ^ハ月^{げつ}と^とい^いて^てあ^あり^り

江和集

てとふ一月のくもトもむるを
 とある一満月をすめ日とみおらんと
 の曆八日をおもてと一正月終るを
 ちとまゝと一二十四氣終るも定日
 あり一月と一とすれ八月のうけ
 もトもむるも定日かく十日時ふ
 もトめて月をえたるはは月を
 見るは月廿四日も毎月定るこのまゝ

二五日の下は海月とあるなりあり
 け五日とせりてとするはは毎年
 十一月の日数定りありて正月を
 三十一日を二月は十八日三月は廿
 四日ハ二十日五月ハ十六日六月ハ七
 月ハ一日八月ハ二日九月ハ十月ハ
 一日十一月ハ十二月ハ初合を年
 十一ヶ月の日数之百六十五日あり

二月廿五日と曰ふ一
 二十九日とふ一日の
 毎がはずし又他州に
 方角月日は何れの方
 ものちう〇子の方と
 あくはあつたすふお
 正月氣うして日中を
 大なるうらむ形を人

壺と奉くまるとは形と
 〇かあづふは十二月
 本大書みむはす神よ
 形野牛の形と蓋せり
 あつたすは十二月に
 年の立をい書のある
 形を人馬とよら矢と
 と蓋せり〇おごるひ

江戸談巻卷之上
 〇四
 吾合二二電載

月の氣きとして日中ひちゆう秋あきの氣きを
 よおぬるさし形かたちを大蛇おび蠶さの
 ごとく大虫の圖あづなあり○里さとから氣
 九月の氣きとして日中ひちゆうの白露はくろ秋
 分の終はつひふ満みちとなりて日中ひちゆう金銀きんぎんと
 かけの天秤てんびんの形かたちと漏ひら畫まを○ひ
 るごは八月の氣きとして日中ひちゆう蒼あざ
 よりとも暑あつまでふ満みちなりて形かたち

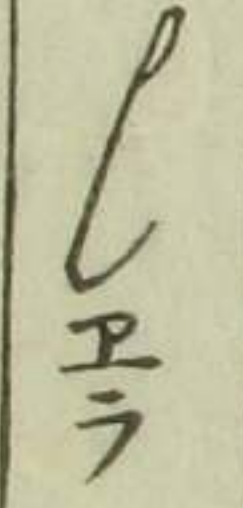
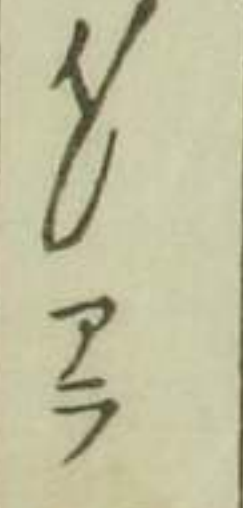
懣うれべる女にと画えある形かたちあり○れを
 是七月の氣きとして日中ひちゆう小暑せうしよ大暑たいしよ
 此こゝ節ふしありて形かたち獅子ししの形かたちと画えを
 ○かんける氣き六月の氣きとして日中ひちゆう
 芒種ぼうしゆより夏至げつしまでより大田おほのうらなりて
 形かたち赤あからいろの大蟹おほのかげの形かたちと漏ひらせり
 ○こころは是五月の氣きとして日中ひちゆう
 立夏りつげ小満せうまんの節ふしより大田おほのうらなりて形かたち

双兒の形画くるものあり〇はるは
 是四月に氣ふして日中の清明
 穀雨の節より田をまき其形又形
 ある牛と画く〇あつとやすき
 三月の氣うして日中落熱あり
 五月分の節より南をりて形白と
 羊と圖画せり〇びーす是二月
 の氣うして日中寒をりて形

節より相違ありて形二魚とあり
 ると信るあり是十二とし日中の
 子よりまきなどのたつてはお節より
 又一晝夜と十二時と定めば古は時
 候ありて風あり

テレツキリヤツトル 漢書のやまのかり倍又
からんと文字と云のほあり

ナ六  ヤエサ  エイ

シ五  ヤアラ  エキサ

ジ デ カ カ キキ ドブルトイユ

シ セ イ イ カペル イユ

ビ ベ ハ ハ ヲ ヲ ヲ ヲ

ギ ア ギ ゲ ニ ナ テ セト

メルウリヤツトル 此字のめき

T 六 M エマ S エサ Y イ

E エ L エラ R アラ X エキサ

D デ K カ Q キワ W ドブルトイユ

シ セ イ イ D ペ V イユ

B ベ H ハ O ヲ U ヲ

A ア G ゲ N ナ T テ Z セト

ドクルリヤツトル

印板用字ありては字のめきもれあり

F 六 W エマ F エサ H イ

C エ Y エラ L アラ L エキサ

J デ B カ Q キワ W ドブルトイユ

C セ I イ P ペ B イユ

百ベ 百ハ 〇ヲ 〇ユ

百ア 百ゲ 〇エテ 〇セト

付不よろのあんころふもーとこの
文字何の是ハ目の中傳るるあ

そまの文字横字あどま似く
は四字ありけ文字を或ッ宛
綴りや早八字との一は是目
此の字彼のどくーこれとあ

横すむよーもめまの
れらああく目本あ〜ちびた
より書と〜めちへくと横
書あり想ドて文字も横
一さいの書抱るいちより書て
たふ納まるありそま人相
よりハ〜言く〜と志ろく眼伸
よ甲〜つ〜延ふ延さ希毛あり

之はハいぎらん人あましがあまの
 物も似て口ぢると舌とあまの
 かし一もあまの世もあまの
 ハもあまの成長して十二三歳より
 遠くあつてしるまよ一歩の命七
 五十歳あまのあまのあまの
 申ふとハほらんそと云國七州
 をせいらんそとぐらうねげ

ういたくさとらうとんと けう
 あまのあまのあまのあまの
 右七州の内紅毛の法も一船出す
 らふの右あまの世とよてあまの
 ごと呼華人ハ和蘭國又紅毛國
 とらふ日本もてハ阿蘭陀もあまの
 七州の國を四人あまのあまの
 こんもんやとあまのあまのあまの

形を仕出—世界を經歷しそ
 交易商賣を業とする世に居る
 日本は四民は多てをもちがひ高
 くとす一れう—のちと士と女
 とも下とにを流る武士ハ殺罰
 と刑るゆへありともむは金の事
 氏殺生をなからんこと定めり是も
 天皇佛の法に隣る也ありん

右の國王は一人をんやれ書政を
 せしらばとらふ是を道徳の中
 よぢやがせしむとふ語ありけな
 にもむらうとせ今もあをまてく
 法は高はけり—ちやがた
 まで交易の貨物と持本つま
 ようぞのらるるうう十女年よ
 まるまづ—おしお定るといふ

さして愛留記とぬ月申す所はたふ
物私して七月の初日を待たふ
俵す八月九月石の何物商賣を
て九月ある定を相帆すせむら
此下も代とびあんとすけかびえ
去るれびあんと代とあま使志
後をつくめ東船一乗とすくえ東船
つまらう一財不使をとりめり友は

旅館おてゆつてえゆるとらひ出るま
よ書のせはふ

○のあがまんすくつるかびあん元
禄年中よまらう一財荒井氏のろ
くのものと同し一申彼かびあん
相渡せしハあふ本國よて五十
年心あのをりありしよ世界
はよてとえん極めんといつるお流

りこし船士の艘仕を糧米塩等
此船中をどのよと積入舟を艘が東
西南北をせしる先は地と云ふ
二三千里をくり東へこぎりし
何となく船中ありは海は風
と多きよ西とこし船中を
ハ行す浅水へげども西へく船
るる一向行と云ふは

本玉(海)りしと云ふ先ハ東方
北に北を走つと云ふは海は
と云ふ又南を走つと云ふは
いづれは北を走つと云ふは
しるしは北を走つと云ふは
たうり北を走つと云ふは
下の海へ舟を走つと云ふは
かく海へ舟を走つと云ふは

能^と里^り濱^はと出^いー南^{なん}の方^{かた}とん^んら
 不^ふ凡^{ぼん}六^{りく}百^{はく}里^りもあ^あん^んとら^らふ^ふあ^あま^まさ
 游^うり^りて南^{なん}より少^すや向^{むか}く^く落^おち
 う^うと見^みーと^と是^{こゝ}ハ世界^{せかい}の正^{ただ}横^{よこ}ま
 ても^もい^いら^らん^んと評^{ひやう}判^{はん}ー^くを^をあ^あり
 さ^さし西^{せい}一^{いつ}河^がー^もの^のい^いつ^つら^ら西^{せい}を^をさ
 ー^して二^にと^と五^ご里^りも^も艦^{かん}船^{せん}ー^よま^まち^ち氣
 の^のこ^こま^まら^らり^りー^らら^ら極^{ごく}子^しま^まし^し出^いで^で之^の河^がほど

へ^へん^んく^くく^くは^はま^まハ^ハを^を定^{さだ}申^{まを}何^{なに}
 や^やん^んよ^よま^まさ^さら^らや^やふ^ふえ^えー^が
 船^{いね}の^の葉^はと一^{いつ}向^{むか}く^くら^らら^らら^らら^らら^らら^ら
 け^けま^まハ^ハを^を船^{いね}の^の葉^はも^もこ^こま^まつ^つの^のく
 お^おー^やま^まら^らく^く一^{いつ}舟^{ふね}の^の及^{およ}び^びけ^けを
 こ^こま^まさ^さら^らは^はま^まハ^ハを^を向^{むか}く^くも^も破^{やぶ}れ^れの^の
 一^{いつ}向^{むか}く^くあ^あり^りて一^{いつ}向^{むか}く^く舟^{ふね}を^をさ^さら^らら^らら^らら^ら
 け^けこ^こま^まら^らく^くな^なま^ま一^{いつ}向^{むか}く^くり^りと

五五

ありし何らるるげと初る人あり
 ましきし水へ流るる舟のものをドセ
 一ハ是も二四百里にぶちしよ是
 りハ船ほどの遠きありける也一
 ひくもかば生産の便ともあるべ
 きしし人々み十人ほどつけおき
 儀来ふど舞く何そぐい来年又
 系へきしし流るる海りりけや

海の外はまうりし金ありはる
 中年より中年といへり一玉はけや
 りししどに室中年のととそま本
 家とが一初中年のしとそか枯
 るししどさし来まきおはるりり
 波濤へつぐりんくくよま中身を
 くる人数少少相もて察すしよ
 妙玉海の外るるを玉ゆへ夜す

年の時ふくむぐく凍死するてい
 相入くことのちハ何の利得もある
 まどきとし法未せざると多りや
 うよ阿葉陀國凡を方と石磨
 して法未するもの多しバ日印未
 る高船もいろくの貸物紙をま
 つくしぐくか玉の産としてハまづら
 あれども世界経歴の波よ交切

十あるものこふ多し一たふするを
 ○押しもの毛押しの折ひ多し
 ○らちや ○らせり ○へるへとあん
 ○むしり ○さあつ ○さるせ
 ○かるさ ○あまん ○さめん
 ○毛種 ○狸紐 世せぐひの
 漆糸のゆと和く南海にほ毛種
 の血とくして漆るといあつはせり

けしととせん海ざうであひあす！
 つらぬびあんに向しよちよにゆぐ
 も川とも紅む藤原まの歌えしは
 押し細と深るあらしんしよ今日
 かなしんよと權の本といつるものふ
 本日もあふ飛も似らあありてを本
 を本よあまはく腐肉あー官よあ中
 けしととせん海あひあすーくせすて

形酒醜あふよくまよ似らう世を
 おくぬら川のあき荒れあひのどく
 河まよーらああるあをかきよこを
 この底を二重に結縷のしよあまの
 りしとととて波をさうらあめあ
 一のあまよああこしーあーあ
 肉も虫のつらあに底のあをさあや
 ありととせん海あま二ろあああ

或二のちとまほしきつゝまほしきぐんハ底
 縮ム冷やぢり或之のまほしきなる
 或之のまほしきまほしきかくのまほしき或は
 此相ハなる或白れまほしきまほしきなる
 ぶんむらりとまほしき何ハのまほしき入
 巖イシノ破やぶまのまほしきまほしきまほしき
 ちやんまほしき地ハのまほしきまほしき
 ほと縮ムまほしきまほしきまほしき

こそ色細し或まほしきまほしきまほしき
 ぶまほしきまほしきまほしきまほしき
 毛細しと漆るにまほしきまほしきまほしき
 桜まほしき和倍の櫻サクラハ血ちまほしき漆るまほしき
 まほしき疑うたがらまほしきハ花はなのまほしきまほしき
 或まほしきあまほしきまほしき和倍酒ワバイまほしきまほしき
 ちやんまほしきまほしきまほしき
 〇何まほしきまほしきまほしき

又一名ありてはもとほりていふものあり
らしといふ漢の紅毛の古流あり今
河よりいふすといふあらす又河をど
あらはといふ是ハ漢名大宛都といふ
織地ありけものよき色このうづくは
極大のかりよりしてやけが神ハサ
も換ぢに堀いしくきやけあて
のいりていりていりていりていり

もろこしありては西域より希に後
はくとんて東方朔が神異記の中にも
西域大宛といふあり大宛のりをえと
いひて大宛都と織りていりて又張華
が博物志郭璞が山海經の序ありて
載りていふありていりていりていり
傳りていりていりていりていりて
是れめいりていりていりていりて

織法とせりけしもの紅毛人も織法と
 ちくべ又火麻の色あて織とつるハ
 唐人の織り傳ふるあり洗白にこ
 らんきりふほえしおろしとて
 被玉北世法とてさき傳とつるのふて
 今ハ織るよりおろんと人れ細織さ
 ちるふ今日本濠洲の産平賀原内
 とつるく東移よきて自工更とて

けしものを織ぬす紅毛人も毛とんて
 大糸織るよりとつるおろも
 と洗と織又
 とさきありて唐ちもおろりつと
 奇代の珠串あるありふさる
 傳る

紅毛波卷之上

〇十九

紅毛波卷類

紅毛波卷の上

